

第2節 大鍛冶場跡

1. 立 地

大鍛冶場は、高殿鉢で生産された銑鉄や歩鉄を素材とし、除滓・炭素量調整を行って鍊鉄に加工する作業場である。近世鉢製鉄では、鋼よりも銑鉄が主として生産され、これを大鍛冶場に回して鉄素材である包丁鉄に加工する間接製鋼法が主流であったことが明らかになっており¹⁰、近世鉄生産における重要な工程の一つであった。

大鍛冶場には、高殿鉢に併設され同じ場所で一貫操業されていたと見られるもの（佐田町檀原遺跡¹¹、頓原町大槻遺跡¹²など）と、単独で立地し高殿鉢から搬入された鍛冶原料で操業されたもの（瑞穂町郷路橋遺跡¹³、頓原町戸井谷尻遺跡¹⁴など）がある。中原遺跡大鍛冶場跡は周囲には掘立柱建物跡しか伴っておらず、單独立地の大鍛冶場跡と考えられる。

鍛冶原料が生産された高殿鉢については、付編第1部にあるように中原遺跡が所在する地域ではあまり確認されていない¹⁵。しかし、周辺の獅子、才谷、志津見地域には多数の高殿鉢が営まれており、これらの地域から持ち込まれた鍛冶原料が使われた可能性もある。

2. 構 造

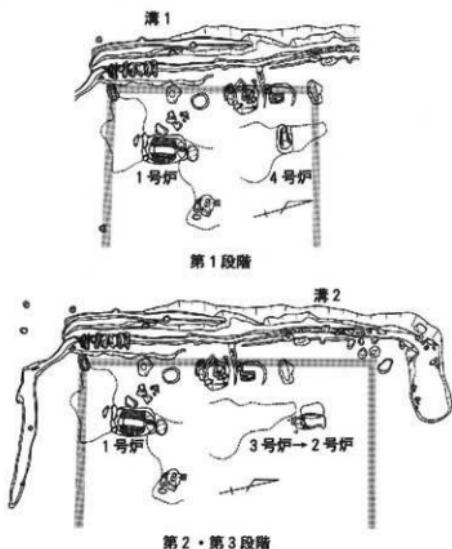
大鍛冶場では、本場、左下場と呼ばれる2基の炉を用いて作業が行われる。左下場においては銑鉄中の炭素分や不純物を除去して左下鉄を作り、これを本場で再加熱、鍛打して鍊鉄（包丁鉄）が作られる。¹⁶

中原遺跡の大鍛冶場跡は、掘立柱建物が建て替えられ拡張されており、炉の作り直しを含めて3時期に区分される。第1段階は古段階の建物で、1号炉と4号炉で操業が行われる。1号炉が大形、

4号炉が小形の炉であり、両者は主軸が直交するように配置されている。

第2段階は新段階の建物で、1号炉と3号炉で操業が行われて、前段階で使われた4号炉は粘土面の下に埋め込まれている。炉の規模はやはり1号炉が大形、3号炉が小形であり、両者の配置は主軸が平行するよう変更されている。また、1号炉は炉床の作り替えが1度認められるが、第2段階で行われたか第3段階で行われたかは不明である。

第3段階も新段階の建物で、1号炉と2号炉で操業が行われている。2号炉は前段階の3号炉のやや東側に3号炉を壊す形



第78図 大鍛冶場跡遺構の変遷

で営まれており、両者はほぼ同じ規模・構造をもっている。

爐の位置はについては、1号炉は南側の短辺に炉と直交するように置かれたことが想定できる。これは1号炉の南側に爐を設置したと見られる土坑があること、北端部に埋石がありこの反対側に爐を置くことが『鉄山必要記事』に記されているからである。2～4号炉の爐の位置は、推定できる手がかりが得られていない。

鉄砧石については、明確にすることはできなかったが、1号炉と4号炉または1号炉と2・3号炉間には粘土を敷いた作業面があり、この空間で鍛打が行われたことは粒状滓、鍛造剥片の広がりから見ても想定される。1号炉北東1.5mの鉄砧抜取状遺構が鉄砧石になる可能性については、粒状滓、鍛造剥片の分布密度を見ると1号炉からその付近に集中していることから想定可能であるが、鉄砧石が原位置にないため、断定はできない。

3. 機能

(1) 錫冶原料

錫冶原料については、そのまま残されているものはなかったが、合鉄塊形滓や合鉄鉄滓、再結合滓の中にその痕跡を留めたものがいくつか認められる。分析資料NAK-16・17・18・24は合鉄塊形滓で、精錬錫冶滓の中に錫冶原料由來の鉄塊が沈み込んだ状態で残存している。このうち、17は過共析鋼（C: 0.77%以上）、24は過共析鋼から白鉄鉄（C: 4.23%以下）と高炭素系である。16は共析鋼（C: 0.77%）から極低炭素鋼（C: 0.005%）までと炭素量に差異があり、18は極低炭素鋼が含まれている。

分析資料NAK-19・25は合鉄鉄滓で、精錬錫冶に供されたものである。19は極低炭素鋼を主体とし、一部に亜共析鋼（C: 0.77%以下）を含む。25は極低炭素鋼から過共析鋼を含んでおり、高炭素から低炭素のものが混在している。

分析資料NAK-8・21は再結合滓で、錫冶原料となる鉄塊、錫冶滓、粒状滓、鍛造剥片などが踏み固められ、水分で銹化し結合した2次堆積物である。8は白鉄鉄から過共析鋼の小鉄塊を3ヶ所にもち、21は白鉄鉄の痕跡を留めた銹化鉄片を含んでおり、ともに高炭素系である。

これらの鉄塊はいずれも砂鉄を原料とするもので、炭素量の高い錫鉄から極低炭素鋼まで、かなり炭素量に幅がある。人錫冶場で使用された錫冶原料については、銚・歩鍋などが用いられたことが知られているが、今回の分析結果はそうした操業実態を遺跡から出土した遺物の上で確認するものとなった。

(2) 爐の機能

人錫冶場には、本場、左下場と呼ばれる2基の炉があることは既に述べたが、これまでに調査された大錫冶場跡では、本場で鍛打作業が行われることから、鉄砧石に近い炉を本場としている例が多い¹⁰。中原遺跡では鉄砧石の位置が明確ではないが、鉄砧抜取状遺構としたものに、鉄砧石が設置されていたとすれば、これに近い位置にある1号炉が本場、2～4号炉が左下場と見ることもできる。

炉の構造は、1号炉は大形で深いのに対し、2～4号炉は小形で浅いという違いがある。これまでに調査された人錫冶場跡では、人形の炉と小形の炉が対になるもの（郷路橋遺跡、広島県大朝町門前遺跡¹¹、福岡県鞍手町犬鳴1・2号大錫冶場跡¹²など）と、ほぼ同じ大きさの炉が対になるもの（広島県東城町保光大錫冶場跡¹³、同大朝町黒専遺跡¹⁴など）が認められる。このうち、門前遺跡で

表7 中原遺跡大鐵冶場跡主要要素一覧表

	種類	製錬	精 錬			鍛 鍊					
			TiO ₂ 2~4%	TiO ₂ 1.1~2%	TiO ₂ 0~1%						
分析資料	鍛冶滓		NAK-1(2.85) NAK-1(2.66)	NAK-7(1.35)	-						
	塊形滓		NAK-5(4.00) NAK-12(2.15) NAK-15(3.18) NAK-23(3.31) NAK-24(2.98)	NAK-18A(1.23)	NAK-12(0.27) NAK-17(0.51) NAK-18B(0.97)						
	含鉄鉄滓			NAK-20(1.51)	NAK-19(0.28)						
	粗鉄錠				NAK-26(0.4) NAK-27(0.09)						
	粒状滓					NAK-3 NAK-9 NAK-13					
統計遺物	鍛造剥片					NAK-4 NAK-10 NAK-14					
	粒状滓	1.0mm以下 19.2 g (0.8%)	1.1~2.5mm 1554.7 g (64.6%)	2.6~5.0mm 615.5 g (25.6%)	5.1mm以上 218.5 g (9.0%)						
遺構	鍛造剥片	1.0mm以下 17.8 g (3.7%)	1.1~2.5mm 444.3 g (92.3%)	2.6~5.0mm 16.7 g (3.5%)	5.1mm以上 2.42 g (0.5%)						
	作業場	新旧2時期の掘立柱建物跡。									
	1号炉	新旧2時期の炉床。新炉床の火窓は長さ1.2m・幅0.7m・深さ0.45m。									
	2号炉	新段階の建物跡に伴う。現状で長さ0.9m・火窓幅0.34m・深さ0.3m。									
	3号炉	新段階の建物跡に伴い2号炉に先行する。現状で長さ0.85m・深さ0.3m。									
時期	4号炉	旧段階の建物跡に伴う。火窓は長さ0.75m・幅0.4m・深さ0.2m。									
	1号炉	¹⁴ C年代A.D.1850±60、地磁気年代A.D.1840±30									
遺構の性格	2号炉	¹⁴ C年代A.D.1830±60									
	①真砂系荒鉄の不純物除去と成分調整を主体とする精錬鍛冶作業を行う。										
	②鍛冶原料は白鉄鉱～過共析鋼までの高炭素鋼系が多いが、一部亜共析鋼も含まれる。すなわち、鍛鉄から歩鏽を原料とする。										
	③生産された製品は、精錬鍛冶滓、鍛造剥片、粒状滓から見て、粗鉄錠まで、包丁鉄の生産までは行われなかった可能性がある。										
	④本人鍛冶場が粗鉄錠生産までの作業場であったとすれば、文献にみる延鍛冶屋のような包丁鉄に加工する作業場と対になるものである可能性がある。										

は小形のがある3号炉で左下場と考えられる白銅⁶が検出されてたことから、小形のが左下場とされている他、犬鳴1号大鍛冶場跡では小形の4号炉で左下場に伴う鳥脚状堆積鉄滓が確認されている。⁷また、保光大鍛冶場跡、黒尊遺跡では鉄砧石との関係から、ともに2号炉が本場、1号炉が左下場とされており、ほぼ同じ大きさのがあっても本場の方に木組みなど入念な地下施設が作られている。これに対し、郷路橋遺跡では鉄砧石との関係から、小形の2～4号炉が本場、大形の1号炉が左下場と考えられている。

出土した椀形鍛冶場から見ると、やはり大きさに大小が認められ、先に見たかの規模に対応したものと思われる。このうち、ほぼ完形で火窓の大きさを示すと考えられるものは、分析資料NAK-5、15、23である。5は小形のものであり、長径26.8cm、短径16.0cm、厚さ8.3cm、重さ4500g、底面に工具痕が顕著に観察できる点が特徴的である。15・23は大形のもので大きさは15が長径36.1cm、短径22.4cm、厚さ16.5cm、重さ10000g、23が長径30.6cm、短径22.0cm、厚さ16.8cm、重さ7500gで、厚く上面、底面に盛り上がりをもっているのが特色で、工具痕が多く残る5とは作業内容が異なっていたものと思われる。これらは鉄滓の大きさから見ると、1～4号炉のどの炉にも入り得るが、炉の規模との対応関係から、5が2～4号炉、15・23が1号炉のものと考えられる。分析結果は、2号炉から出土している含鉄椀形滓NAK-12も含め、いずれも精鍊鍛冶場であり、1号炉と2～4号炉では炉の規模・形態や作業内容が違うにも関わらず両者に大きな差は認められなかった。

次に、鍛打作業に伴う粒状滓、鍛造剥片について見ると、ともに鍛打前半から後半までの各段階のものを含んでいる。粒状滓では、赤熱鉄素材の酸化防止用に塗布した粘土汁由来のガラス質のものが含まれているものが見られるのが特色である。また、鍛造剥片については仕上げ段階である3層分離型のものも含まれているが、あまり顕著ではない。

以上のように見てきたが、遺構のあり方という点では大形の1号炉が本場、小形の2～4号炉が左下場という想定も可能であり、鉄砧抜取状遺構との位置関係からも言えそうである。しかし、出土している遺物から見れば、椀形滓の形状・大きさに違いがあることから異なる作業が行われていたことは想定できるが、いずれも精鍊鍛冶場であり、2つの炉の間に本質的な差異は見られない。これはこの大鍛冶場でどういった製品が作られていたかということにも関わっており、それぞれの炉の機能についてはなお課題を残している。

(3) 製 品

製品としては粗鉄錠があり、分析資料NAK-26と27があげられる。26は長さ12.0cm、幅6.4cm、厚さ3.0cm、重量743.4g、27は長さ14.4cm、幅7.0cm、厚さ3.5cm、重量915.1gで、若干の差はあるが両者はほぼ変らない程度の大きさをもっている。分析の結果、26は極低炭素鋼から亜共析鋼と炭素量に差のあるもの、27は脱炭がほぼ完了した軟鋼（C：0.15%以下）であることが分かれている。前者は大鍛冶場内で出土していることから半製品と考えられ、後者は大鍛冶場の外で出土していることから搬出された製品とも見られる。

遺跡に残されているものだけで判断できない点もあるが、この大鍛冶場では包丁鉄ではなく、その半製品である粗鉄錠生産を主体としたものであった可能性がある。鍛鍊鍛冶場が見られないことや仕上げ段階の鍛造剥片が少ないとなどは、こうした製品の実態に対応しているものと考えられ、大鍛冶場にもいくつかの作業段階があったことも想定できる。⁸

表8 発掘調査された近世大鍛冶場跡一覧表

遺跡名	所在地	立地	炉	時期	文献
郷路橋遺跡	島根県邑智郡瑞穂町市木	単独	4基3時期	18世紀後半～19世紀中頃	(48)
中新田遺跡	島根県大原郡大東町塩田	単独	2基?	18世紀末～19世紀初頭	(60)
櫛原遺跡	島根県簸川郡佐出町上橋波	鉢併設	1基?	18世紀後半～19世紀中頃	(17)
戸井谷尻遺跡	島根県飯石郡頓原町角井	単独	2基		(16)
大槻鉢跡	島根県飯石郡頓原町志津見	鉢併設	5基		(6)
中原遺跡	島根県飯石郡頓原町八神	単独	4基3時期	19世紀中頃	
神原II遺跡	島根県飯石郡頓原町志津見	鉢併設?	2基		(7)
獅子谷遺跡	島根県飯石郡頓原町角井	単独	6基		(23)
保光たら	広島県比婆郡東城町栗田	鉢併設	2基	18世紀中葉前後	(55)
門前遺跡	広島県山県郡大朝町大塚	単独	6基	近世後期	(53)
黒尊遺跡	広島県山県郡大朝町筏津	単独	2基	19世紀前半	(56)
堺谷鍛冶跡	広島県庄原市川北町	鉢併設	2基	～明治10年代	(61)
大成山遺跡	岡山県阿哲郡神郷町油野	鉢併設	6群3基以上		(62)
犬鳴1号大鍛冶場跡	福岡県鞍手郡若宮町犬鳴	鉢併設	4基3時期	19世紀前葉～中葉	(54)
犬鳴2号大鍛冶場跡	福岡県鞍手郡若宮町犬鳴	鉢併設	4基	19世紀前葉～中葉	(54)

4. 時期

中原遺跡大鍛冶場跡は、作業場内の具体的な機能にはなお不明な点を残しているが、2つの炉が対になって操業されている点や、炉の規模・構造などから見て、近世後半に見られる典型的な大鍛冶場である。

これに関わる文書としては、能義郡広瀬町の金屋子神社奉加帳があり、「寛政二（1791）年八神大谷鍛冶屋」「文政二（1819）年 大谷鍛冶屋 藤五郎」という記載がある。中原遺跡は旧八神村大谷地区に属しており、この大谷鍛冶屋が中原遺跡を指すことも考えられる。ただ、遺跡としての確認はできなかったが、大谷地内には「字かじや原」というところが他にあり、金屋子神社奉加帳の記載に該当する大鍛冶場かどうかは現状では断定できない。

陶磁器はあまり出土していないが、いずれも在地系陶器であり、近世末のものと考えられる。

自然科学分野の年代測定では¹⁴C年代で1号炉がA. D. 1850±60、2号炉が1830±60、地磁気年代測定では1号炉がA. D. 1840±30という結果が得られている。こうして見ると、陶磁器の年代観と¹⁴C年代、地磁気年代は19世紀前半を中心とする時期でほぼ一致しており、これが大鍛冶場の操業年代と考えられる。

註

- (1) 地形・地質については下記文献を参考にしている。
a. 島根県「土地分類基本調査—石見人田・大浦一」1979
b. 島根県「土地分類基本調査—三瓶山一」1981
- (2) 島根県教育委員会「板屋Ⅲ遺跡」1998
- (3) 前掲註(1)と同じ。
- (4) a. 朝原町教育委員会「五明出遺跡」1991
b. 朝原町教育委員会「五明田遺跡発掘調査報告書」1992
- (5) 島根県教育委員会「森遺跡・板屋Ⅰ遺跡・森脇山城跡・阿丹谷辻堂跡」1994
- (6) 島根県教育委員会「島根県教育文化財調査センター年報」V 1997
- (7) 島根県教育委員会「島根県教育文化財調査センター年報」VI 1998
- (8) 深田浩「島根県朝原町下山遺跡出土の屈折角上偶」『考古学雑誌』第81巻第4号 1996
- (9) 島根県教育委員会「門遺跡」1996
- (10) 前掲註(7)と同じ。
- (11) 前掲註(7)と同じ。
- (12) 朝原町教育委員会「朝原町の遺跡—志々地区ー」1989
- (13) 前掲註(12)と同じ。
- (14) 1998年度朝原町教育委員会発掘調査。
- (15) 前掲註(5)と同じ。板屋Ⅰ遺跡S K02・03は、報告書では触れられていないが、ともによく焼け土坑側面に横口をもつこと、鉄溶接で場が付近にあること、鉄溶接で場から板屋Ⅲ遺跡2・3号炉と同様の大形羽口が出土していることから、板屋Ⅲ精錬鍛冶炉と考えられる。
- (16) 島根県教育委員会「島根県教育行文化財調査センター年報」IV 1996
- (17) 島根県教育委員会「櫛原遺跡・谷川遺跡・殿渕川毛宅前鍋跡」1997
- (18) 前掲註(16)と同じ。
- (19) 前掲註(6)と同じ。
- (20) 前掲註(6)と同じ。
- (21) 前掲註(6)と同じ。
- (22) 竹広文明「たら吹き製鉄の成立とその展開」「たら研究」第36・37号 1996
- (23) 1998年度島根県教育委員会発掘調査。
- (24) 松井繁司氏の御教示による。
- (25) 下原重伸「铁山必要記事」1784
これによれば、「火久保の尻には上面平成、石を埋む。」とあり、羽口を設置した反対側の端部に上面が平らな石を置くことがあったことが分かる。また、その機能についても「鐵が上るに、此所久保壊する爲に」とあり、火窓の保護のために蓋くとしている。穴沢義功氏のご教示による。
- (26) メタル度は、小形全属探知機の度数。これは金属鉄が残留在するため穴沢義功氏が開発したもので、基準感度は次のとおりである。
H (○) : Hは最高感度でごく小さな金属鉄が残留することを示す。
M (◎) : Mは標準感度で一般的な大きさの金属鉄が残留することを示す。
L (●) : Lは低感度でやや大きな金属鉄が残留することを示す。
特L (☆) : 特L低感度で以上の大きな金属鉄が残留することを示す。
- (27) 磁導型長銅鑄でタキが施されたものは、奈良、平安時代の北陸地域に類品がある。関 雅之氏の御教示による。
- (28) 菩谷鉢で使われていた炉築用具の中に灰熊手と呼ばれる形態の似た類品があるが、大きさに違いがあり、大鍛冶用具とは断定できない。
- 島根県教育委員会「菅谷鉢」1968
- (29) 島根県教育委員会「岡田薬師壇」1986
- (30) 松江市教育委員会「向山古墳群発掘調査報告書」1998
報告書では1次壇丘・2次壇丘という表記方はなされていないが、石室を築造する際の盛土とその上に積まれた互層状の盛土には明確な差があり、前者の盛土が終わった段階で須恵器子持壺が淡道大井石付近に置かれたことも明らかになっている。
- (31) 出雲市教育委員会「史跡今市大念寺古墳保存修理事業報告書」1988
- (32) 山口県教育委員会「下関市岩谷占墳発掘調査報告書」1972
- (33) 山口県教育委員会「朝日墳墓群II・鴻ノ峰1号墳」1977
- (34) 広島県山口町教育委員会「池津第1号古墳発掘調査報告書」1979
- (35) 山崎信二「横穴式石室の地域別比較研究ー中・四国編ー」1986
- (36) 稲板光彦氏の御教示による。
- (37) 前掲註(4)と同じ。
- (38) 山本 清「山陰の須恵器」『島根大学開学十周年記念論集』1960
- (39) 大谷晃二「山陰地域の須恵器の編年と地域色」『島根考古学会誌』第11集 1994
- (40) 白右太一郎「畿内における古墳の終末」『國立歴史民俗博物館研究報告』第1集 1982

- 48 前掲註⁴⁷に同じ。
- 49 前掲註⁴⁹に同じ。
- 50 近藤哲雄「東伯晉における横穴式石室の様相」『島根考古学会誌』第4集 1987
- 51 前掲註⁵²に同じ。
- 52 a. 高橋一郎『奥出雲横田とたら』1990
b. 高橋一郎ほか「山雲の近世企業たらの歴史」『BUMA IV'98国際金属歴史会議しまね』1998
c. 河瀬正利『たら吹製鉄の技術と構造の考古学的研究』1995
- 53 前掲註⁵³に同じ。
- 54 前掲註⁵⁴に同じ。
- 55 島根県教育委員会『中国横断自動車道広島浜田線建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書』Ⅲ 1991
- 56 前掲註⁵⁵に同じ。
- 57 中原道跡が所在する旧八神村大谷地区には「新原」という小字がある。現地踏査の結果、鉄滓などの散布は認められず遺跡としての確認はできなかったが、周辺に未確認の高級鉄があることも考えられる。
- 58 依 図一「古来の砂鉄製鍊法（たら吹き製鉄法）」1932
- 59 前掲註⁵⁶に紹介されている鳥取県日野郡都合山大殿治屋の配置を見ても、本場の側に金敷が置かれ、本場と鉄砧の位置が近いことを示している。
- 60 財團法人広島県埋蔵文化財調査センター『中国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』Ⅲ 1991
- 61 福岡県教育委員会『犬鳴』Ⅱ 1991
- 62 保光たら発掘調査団『保光たら』1985
- 63 大朝町教育委員会『黒尊遺跡』1995
- 64 日立金属株式会社安来工場和鋼博物館「広島県門前製鉄遺跡出土鉄滓の調査」「中国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書」Ⅲ 財團法人広島県埋蔵文化財調査センター 1991
- 65 大澤正己「犬鳴口原鉄山・犬鳴たら谷鉄山出土製鉄関連遺物の金属学的調査」「犬鳴」Ⅱ 福岡県教育委員会 1991
- 66 前掲註⁶⁵には「延暦治屋」についての記載があり、包丁鉄の加工が別の作業場で行われた可能性がある。
- 67 大東町教育委員会『塩田中新田製鉄跡』1994
- 68 佐原市教育委員会『堺谷鍛冶跡』1995
- 69 光永真一「岡山県阿哲郡神郷町大成山たら遺跡群」『平成9年度たら研究会資料集』1997

写 真 図 版



1. 中原遺跡調査前全景（上空から）

図版2



1. 調査前全景（北上空から）



2. 調査前近景（北東から）



1. 調査前近景（古墳付近：北東から）



2. 調査後近景（北東から）

図版4



1. 調査後全景（南東上空から）



2. 調査後全景（東上空から）



1. 調査区北西部試掘坑土層（西から）



2. 調査区北西部近景（北東から）

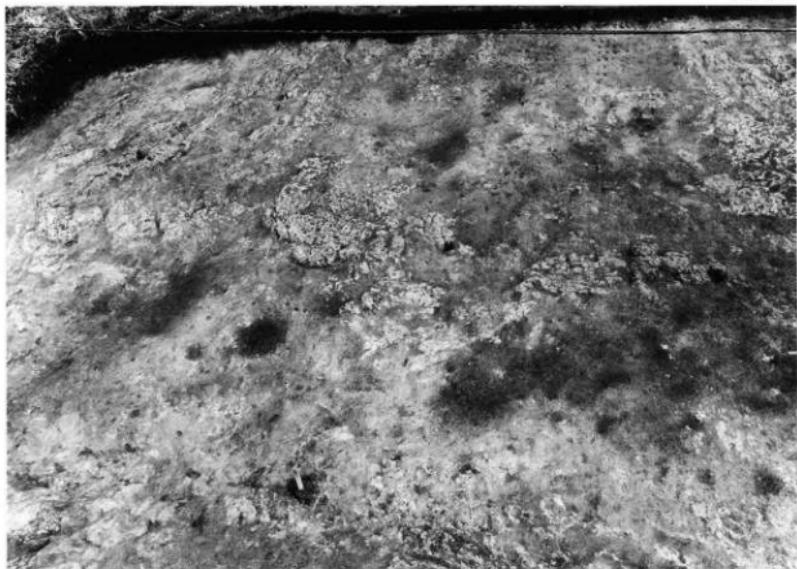
図版6



1. 調査区北西部西側造構検出状況（北から）



2. 調査区北西部西側造構完掘状況（北から）



1. 調査区北西部東側遺構検出状況（北から）



2. 調査区北西部東側遺構完掘状況（北から）

図版8



1. 調査区北西部東側遺物出土状況（南東から）



2. 1号土坑遺物出土状況（北東から）



1. 古墳調査前近景（東から）



2. 古墳調査前近景（南から）

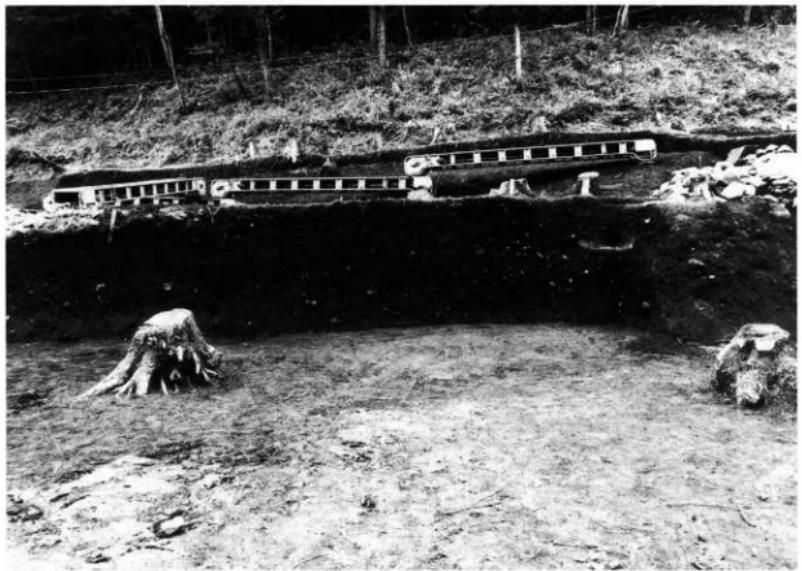
図版10



1. 墳丘a-b断面 石室北側土層（東から）



2. 墳丘a-b断面 石室奥壁付近土層（東から）



1. 墓丘a-b断面 石室南側土層（東から）



2. 墓丘e-f断面 土層（南から）

図版12



1. 墓丘c-d断面 石室西側土層（南東から）



2. 墓丘c-d断面 石室西側壁付近土層（南から）



1. 石室調査前近景（東から）



2. 石室調査前近景（南から）

図版14



1. 石室上土砂除去後近景（東から）



2. 石室上土砂除去後近景（南から）



1. 石室上礫除去後（東から）



2. 石室上礫除去後（南から）

図版16



1. 石室内転落天井石除去後（東から）



2. 石室内転落天井石除去後（南から）



1. 石室前面砾群検出状況（南から）



2. 石室前面砾群断ち割り状況（東から）

図版18



1. 石室埋土縦断土層（前庭部側：南東から）



2. 石室埋土縦断土層（玄室側：東から）



1. 石室中央部横断土層（北から）



2. 石室中央部床面横断土層（南から）

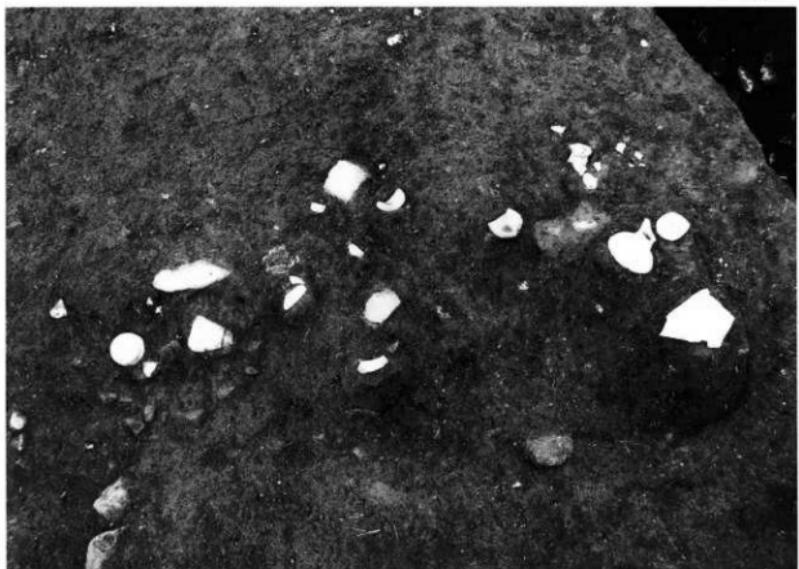
図版20



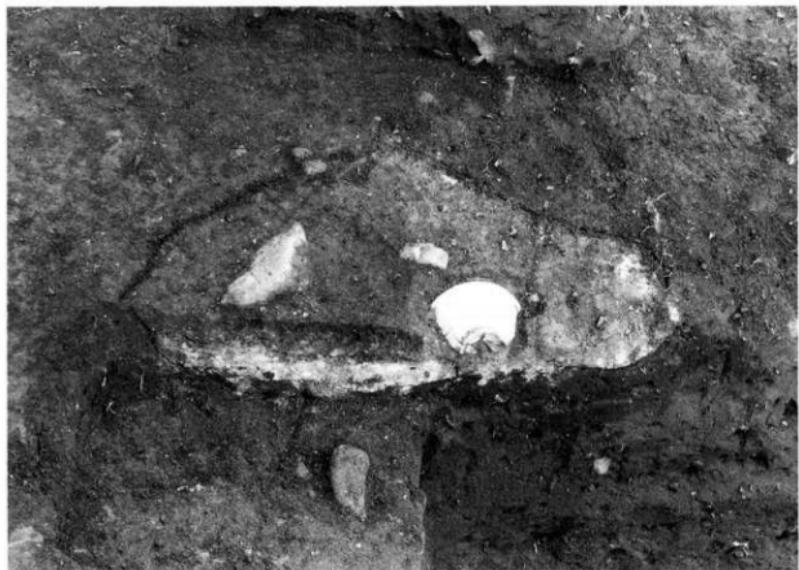
1. 石室前庭部須恵器出土状況（東から）



2. 石室前庭部須恵器出土状況（東から）



1. 石室西側墳丘内須恵器出土状況（東から）



2. 石室前庭部2号土坑検出状況（南から）

図版22



1. 石室内完掘状況（東から）



2. 石室内完掘状況（南から）



1. 石室前庭部（南から）



2. 石室西側壁（南東から）

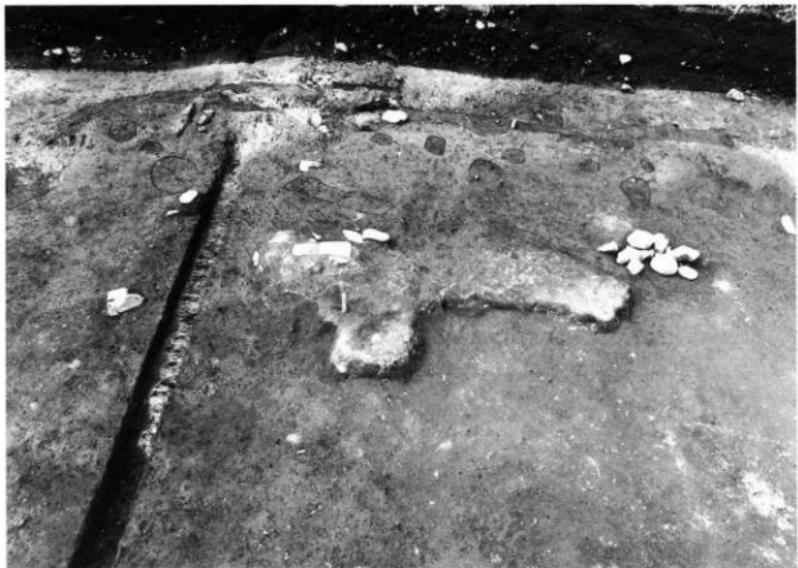
図版24



1. 石室奥壁（南から）



2. 石室玄門部（北から）



1. 1号掘立柱建物跡検出状況（南東から）



2. 1号掘立柱建物跡完掘状況（南東から）

図版26



1. 1号掘立柱建物跡P.1柱根検出状況（南東から）



2. 1号掘立柱建物跡P.2柱根検出状況（南東から）



1. 1号掘立柱建物跡焼土を含む面縦断土層（南東から）



2. 1号掘立柱建物跡焼土を含む面遺物検出状況（南東から）

図版28



1. 溝枡状遺構（東から）



2. 溝枡状遺構埋土堆積状況（南から）